



会報第1号 2017年11月 後援:スペイン大使館

◆沖縄スペイン協会設立の話

琉球大学教育学部 教授 上原由記音

皆様、こんにちは。沖縄スペイン協会の会報をお届けいたします。
この協会の設立のきっかけは、2016年7月に第86回琉大21世紀フォーラムに東京から駐日スペイン国大使ゴンサロ・デ・ベニート閣下がいらっしゃったことでした。私は東京で日本スペインピアノ音楽学会の会長としており、その関係から、かねてより大使とお親しかったので、琉球大学副学長の外間登美子先生から「沖縄スペイン協会」設立というご提案を頂きました。ベニート大使がこの提案を大変喜ばれたので、私は「微力ながらお力になりましょう」とお約束をしました。

自己紹介が遅れましたが、私は2013年に琉球大学に赴任して参りました上原由記音と申します。スペイン音楽を専門に研究しているピアニストで、スペイン政府の助成金によってCDや著書も出しており、スペイン大使館とはヨーロッパから帰国した1980年よりもう37年のお付き合いです。

ベニート大使が東京にお帰りになってから、スペイン歌曲界の重鎮服部洋一先生のお知恵をお借りし、沖縄で色々な方にお会いしました。そしてスペインに詳しいアーティストの方々が「お力を貸しましょう！」と名乗りを上げて下さいました。それで、沖縄スペイン協会ができたのです。スペイン大使館では、ベニート大使は勿論、文化科学担当参事官のアントニオ・デオリさんも喜んでくださり、この協会はスペイン大使館公認となり、このお二人は協会の「特別会員」として参加してくださっています。

今年は4月に本国スペインからフェリーペ6世が来日なされ、私は「日本スペインピアノ音楽学会」と「沖縄スペイン協会」の代表として謁見いたしました。せっかくのチャンスなので琉装でお会いしましたら、「美しい！なんてエレガントでしょう」と喜んで下さいました。

協会の活動は、2017年1月に旗揚げ公演「スペインじょ〜と〜」を開催し、その後、毎月、楽しいコンサートやお料理講習など楽しいイベントを行いました。

スペインに詳しいメンバーは沖縄に少なく、それぞれがプロフェッショナルで多忙のため、来年度は例会開催を隔月にしていこうと考えています。これからも変わらず、この「沖縄スペイン協会」をよろしく願っています。



スペイン国王フェリーペ6世謁見

~~~~~

## ◆写真展「ガリシアーサンティアゴ巡礼の聖地」を振り返って

琉球大学法文学部 准教授 酒井アルベルト

10月は当協会の例会に代わって、特別な企画が行われました。まずは、17日から22日までに沖縄県立博物館・美術館で開催された写真展「ガリシアーサンティアゴ巡礼の聖地(Galicia, capital del Camino)」に協力しました。私が把握している限りでは、駐日スペイン大使館が沖縄で文化イベントを主催するのは初めてだったので、それに微力ながら関わることができたのは大変嬉しい限りです。



この展示会が開催された背景に、ふたつの理由があります。ひとつめは、昨今の大使館の方針として、東京や関西だけではなく、日本各地でスペイン文化を広めることに取り組む姿勢です。その一環として、スペイン関係の団体やスペイン人同胞が住む地域とのつながりを強化することが重要視されています。そういう意味では、昨年度発足した沖縄スペイン協会の存在は、今回の企画の大きなきっかけとなったのです。

ふたつめの理由は、沖縄の皆さんにスペインの大切な文化遺産のひとつである「サンティアゴ巡礼路 (Camino de Santiago)」を紹介することです。スペイン北西部に位置するサンティアゴ・デ・コンポステーラ(ガリシア州)を目指すこの巡礼の道は9世紀に生まれたとされており、スペインのみならず、中世のキリスト教信仰を基盤にしたヨーロッパ文化を性格づける役割を果たしました。巡礼路上にある歴史的建造物群はユネスコの世界遺産に登録されていると同時に、ちょうど30年前の10月23日に、欧州評議会の「文化ルート」(Cultural Route of the Council of Europe <http://culture-routes.net>)に指定されたのです。ガリシア州出身のフォトグラファー、故ルイス・オカーニャの作品は、幻想的な白黒写真で、サンティアゴ巡礼が駆り立てる神秘性と探求心を見事に表現しています。

また、開催期間中にスペイン大使館のホセ・アントニオ・デ・オリ文化科学担当参事官が沖縄にお越しになったことを機に、感謝の気持ちを込めて10月22日に歓迎パーティーを開きました。そこで当協会の会員である小波津美奈子先生(沖縄女子短期大学・教授)に沖縄の子守唄(「山の子守唄」、「童神・わらびがみ」)を感動的なアカペラで歌っていただき、沖縄市スペイン語サークルのメンバーらがガリシア州の民族舞踊「ムニエイラ」を熱演しました。

複数の団体や機関(大使館、沖縄スペイン協会、沖縄市スペイン語サークル、琉球大学スペイン語サークル)の協力のもと、この企画を成功に導くことができたことに、大きな意義を感じました。これを皮切りに今後も、文化・芸術のレベルで沖縄とスペインの交流がより一層深まることを願っております。

#### 写真展概要

期間:10月17日(火)~22日(日)

場所:沖縄県立博物館・美術館 県民ギャラリー

内容:ルイス・オカーニャ「ガリシアーサンティアゴ巡礼の聖地」

主催:駐日スペイン大使館

協力:沖縄スペイン協会・沖縄市スペイン語サークル主催



#### 【デオリ文化科学担当参事官・歓迎パーティー】

10月20日(金)

時間:18時スタート

場所:沖縄県立博物館・美術館 県民ギャラリー(その後、2階喫茶店へ移動)

主催:沖縄スペイン協会・沖縄市スペイン語サークル



(アルベルト先生&ホセ・アントニオ・デ・オリ参事官)



## ◆スペインギターコンクールに参加して

ノエル ピンクスリー



この度第35回スペインギター音楽コンクールで優勝する事ができて嬉しく思います。10月8日、東京都台東区生涯学習センター、ミレニアムホールで行われたコンクールは全国から35名が参加し、僕を含む6名が本選に残りました。課題曲から自由曲まで全てスペイン作曲家による作品を演奏して競い合うというコンクールで、課題曲ではE. グラナドスのスペイン舞曲第5番を二次予選に、ゴヤのマハを本選に演奏し、本選自由曲にはJ. ロドリゴのヘネラーフェのほりととJ. トゥリーナのセビリア風幻想曲を演奏しました。すべての曲が僕の大好きな曲で、もちろん緊張しましたが最終的には楽しんで演奏することができました。結果を聞いた際には本当に信じられなかったです。スペインでの講習会の参加や今後の東京での演奏会の機会を頂けたことが沖縄に住んでいる僕にとって大きなチャンスであると思います。演奏自体は僕自身が満足いくものではありませんでした。本番で力を出すことの難しさをあらためて感じさせられました。

二次予選では、ホールがどういう風に響くのかわかりませんでしたので、結構緊張しました。しかしとてもよい響きで(今まで弾いたホールの中でもトップクラスでした)本選では入る前から落ち着くことができ、ステージにあがってもしっかり自分の音に耳を傾けることができました。弾いていて気持ちよかったです。また1月28日にミレニアムホールで弾けることを楽しみにしています。今後も沖縄を拠点にスペイン音楽を中心にギター界を盛り上げていこうと考えていますので、応援よろしくお願いいたします。

## ◆スペインの絆 運命の出会い

琉球大学教育学部 教授 服部洋一

1981年9月、私はアンカレッジ空港のトランジット待合ゾーンで、次の日本行きの飛行機を待つ乗客たちが行き交う中、どこか空いている席はないものと捜していた。ちょうど、その前年の秋に、ウィーン国立歌劇場の引越越し公演が民主音楽協会主催で、日本で行われ、来日していた同歌劇場合唱総監督のN.バラッチ氏に私はスカウトされ、81年のパイロイト祝典音楽祭のコア(合唱)のテノール歌手として雇われ、ワーグナーの楽劇5本に出演しての帰国の途中であったのだ。その待合室で、一段と光を放ち、目を引く存在があった—白いワンピースにつばの広い帽子を、まるで「ローマの休日」のオードリー・ヘップバーンのようにかぶり、組んだ膝の上に大きな楽譜を広げて、優雅な手つきでページ1枚ずつ開きながら見入っている女性—。こんなところで、同じ音楽をやっている人と出会えるなどということは、今考えても、ちょっと稀なこと。ちょうどその横が1席空いていたので、私は興味津々、彼女の傍らに腰掛けながら、このどう見ても「深窓の麗人」という言葉がフィットする初対面の女性に声をかけたのだった—「ピアノをお弾きになる方なのですか?」。すると、その人はとても気さくに「ええ、いまピアノで留学したフランスからの帰りですの」。このお洒落な服装で、しかも、おフランス帰り!これはどういう偶然のいたずらか、北の果てアンカレッジで、完璧な、お嬢様アーティストに出会えるとは!それが、今やスペイン・ピアノ音楽のスペシャリストとして活躍中の上原由記音さんと私との出会いであった。今を遡る36年も前のことである。

そこから会話が弾み、私は自分がテノール歌手で、東京藝大の学部3年生、つい何日か前まで西ドイツ(当時)のバイエルン地方パイロイトでオペラを歌ってきたその帰りであると自己紹介。彼女は、フランスで、スペイン人の師匠ルイス・ピポ氏に師事してピアノ技法を磨き、師匠から「君はフランスものもいいけれど、スペインものを手掛けたらきっといいピアニストになる」とアドバイスを受け、これからはスペインのピアノ曲をどんどんやっぺいこうかと考えていると語った。奇しくも私は、オペラや声楽を志した高校2年生の時から、来日するイタリア・オペラ公演の主役たちに何故こんなにもスペイン人歌手が多いのだろう、きっとスペインにはイタリアのベル・カント唱法の伝統が脈々と受け継がれているからなのではないか。将来はイタリアやドイツ、オーストリアよりも、私はむしろスペインに留学したいと思っている、というようなことを伝えたと思う。そのわずかな会話のやり取りで、私たちは、お互いが様々なジャンルのあるクラシック音楽の中でも、とても珍しくスペインという同じ方向を目指している者どうしであることを感じたのだった。

それから、私は東京藝大の学部を2年後に卒業、さらに修士課程を3年間で修了し、修了演奏はフーゴ・ヴォルフの「スペイン歌曲集」から歌い、論文においては同作品のドイツ語詩と、その基となった中世、ルネサンス、バロックのスペイン詩との比較研究に基づきつつ、いかにドイツ人作曲家ヴォルフが、スペイン気質とラテン的世界観に魅かれつつ、独自のリート表現を展開していったかについて論じた。修士時代に行ったヴォーカル・アンサンブル・グループの演奏会にも上原さんは来てくれて、演奏会后「こうやっ



てまた会えるなんて、なんか嬉しいわあ」と声をかけてくれた。そして私が、博士課程に進もうと決意したときに、わずか1か月でスペインものをさらわなければならない、これを携えて博士課程の入試を受けねばならぬという、(歌の世界でもピアノの世界でもスペインものを手掛ける人がほとんどいなかったその時に)入試のピアノ伴奏を上原さんが快く引き受けてくれたのだった。博士課程の在学中も、彼女とはスペイン音楽こだまの会麻生支部を結成、ギタリストの江間常夫氏、そして私と同年のギタリスト福田進一氏とともにコンサートも行ってきた。

今や琉球大学教育学部音楽棟の1階には、私たち二人の研究室が隣り合って並び、ただでさえ珍しいスペイン音楽の、その専門家が琉大に二人もいるという、贅沢な状況となっている。沖縄は、日本のスペイン、日本のカタルーニャではないかと私は、琉大に赴任して24年間ずっと変わらず感じてきたが、まあ、その詳細は次回に譲るとして、この地にスペインをこよなく愛し、その文化を広げていこうとする人が集うのも何かの必然があるからではないかと感じている。

## ◆スペイン料理のご紹介 Cocina Española

スペインバル ラストレス ラマス 内山三枝

マッシュルームの生ハム詰め Champiñones Rellenos de Jamón



マドリードのガイドブックによく紹介されているバル  
“Mezon del Champiñón”

その店名にもなっている名物料理、Champiñones Rellenos de Jamón.

マッシュルームに刻んだ生ハムとニンニクを詰めて、鉄板で焼いたもの。

バゲットをお皿代わりにひとくち食べると、生ハムのだしとマッシュルームとオリーブオイルがじゅわっと口の中に広がります。ワインがすすむスペインらしいおつまみの一つ。

## ◆例会のお知らせ

11月26日 15時より スペイン料理教室第2回トルティーリャ 会費の他に材料費300円が必要です。☎098-943-4122

12月3日 15時より アルテ赤田ホール 服部洋一 スペインのクリスマスソングを歌おう! ☎098-884-7514

沖縄スペイン協会 総会のお知らせ 12月3日 コンサート終了後(17時～)

欠席なさる方は必ず委任状の提出をお願いいたします。

## ◆フラメンコ音楽について

大城 和美

日本ではフラメンコといえば音楽というイメージより、ダンス系の習い事の一つとしての知名度が高いように思います。

歌やギターなどの興味ある方も少なくなでしょうけど!

フラメンコ音楽のスパイスとして踊り(バイレ)があり、主体は歌(カンテ)ギター(トケ)手拍子(パルマ)といったところでしょうか

私たちが主にフラメンコを知ってもらうことの重要な部分として、フラメンコリズムを取り上げて活動しております。手拍子(パルマ)は大変重要なパートであり、パルメーロといって手拍子(パルマ)専門のアーティストも存在します。曲にメリハリをつけるためギター伴奏を休止させ、パルマのみの伴奏で踊る部分も存在します。



私達の両手は素晴らしい楽器になりえるのです。

そしてもう一つのフラメンコ音楽の活動のパートナーにカホンを使用しております。手拍子(パルマ)と同じ役割をする楽器の一つですが、

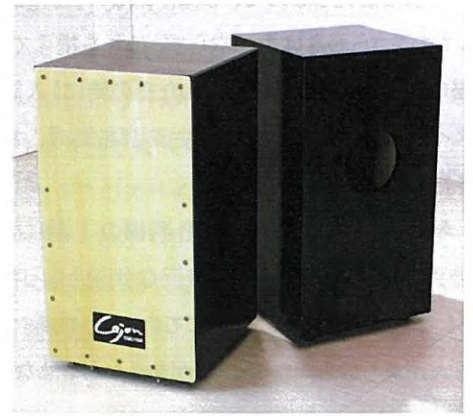
ただ、ここで忘れてはいけないのがフラメンコにおけるカホンの存在です。

カホンという楽器はもともとペルー発祥の楽器なのですが、フラメンコギターの名手・パコ・デルシアがペルーのカホン奏者からカホンを譲る受けることで、フラメンコにカホンが積極的に取り入れられるようになりましたと言われております。

フラメンコの発展とともにカホンは重要な伴奏楽器として定着し、世界中にその存在が知られるようになったと言われております。

現在では、カホンはフラメンコにとって欠かせない楽器になっています。

ギターとの相性抜群のカホンをフラメンコギタリストは放ってはおかなかったのでしょうか。



カホン



## ◆【ガリシア・サンティアゴ巡礼の道】展からみる仲間と辿る道

沖縄女子短期大学 児童教育学科 小波津 美奈子

声楽家である私とスペインとの出逢いは、若かりし頃上野東京文化会館大ホールで行われた、二期会オペラ本公演、ヴェルディ作曲『ドン・カルロ』の舞台でした。

東京藝大大学院在学中、二期会の研究生を終え、オーディションで掴んだ、小姓テバルドの役で、『フィガロの結婚』のケルビーノ、『バラの騎士』のオクタビアン等、現在より10数キロ痩せていた私は、当時“Hosen⇒ズボン”役者(歌手)として、舞台狭しと駆け回っていました。

『ドン・カルロ』は題材として場面はスペインではありませんが、ヴェルディ作曲のオペラに於いて、テキストはイタリア語で書かれています。東京公演当時は和訳時代で、ヴェルディの大作を本格的に二期会が本公演として行うには、未だ数作目だったと記憶しています。舞台上で、背後から聴こえる異端者の合唱は、ヴェルディ旋律の荘厳さの中にも、悲痛な叫びとして同じ舞台に立ちながらグサリと心に響き渡って聴こえてきたものでした。

さて、今回の【ガリシア・サンティアゴ巡礼の道】として沖縄県立博物館・美術館にて公開された写真展は、沖縄スペイン協会、琉球大学スペイン語サークルの共催によって開催されました。開催を記念し、東京のスペイン大使館参事官 デオリ氏を沖縄にお迎えすることが出来、歓迎のレセプションも開かれ楽しい一時を持つことが出来ました。

沖縄スペイン協会設立にあたっては、琉球大学教授、スペイン音楽のスペシャリストでピアニスト上原由記音氏、服部洋一氏、琉球大学アルベルト・酒井氏らのご尽力は、沖縄にあって、スペイン文化の持つ情熱とスペイン文化研究の深さによりなされたものであると確信いたしております。その心根に動かされ、スペインの声楽家、A.クラウス、P.ドミンゴ、J.カレーラス、ロス・アンヘレス、テルサ・ベルガンサを通して知り得たスペイン。未熟者の私も、会員になった訳ですが、スペイン文化が色濃く残るアルゼンチンに多数の親戚を持つ身としても、スペイン語への挑戦へと重い腰を動かさざるを得ないようです。そしてまた、来年にはスペイン歌曲にも挑もうかと・・・！一寸不安材料が無きにしても非ずですが、そこはスペシャリストのお仲間の皆様のお力もお借りしつつ・・・。

うちな一嫁として20数年、沖縄で出逢った沖縄の歌曲と共に、新たに挑戦するスペイン歌曲。一寸ワクワク、ドキドキ！！昨年65回目の誕生日を迎え、新たにATM(明るく・楽しく・前向きに)の気持ちで、歌手として挑戦し続け、人生後半戦の道筋を踏みしめて行きたいものです。